

二松学舎大学人文学会

第一三一回大会

要旨集

二松学舎大学人文学会第 131 回大会

プログラム・要旨集

■日 時 2025 年 12 月 13 日(土) 12:50~16:35

■開催方式 対面(講演のみ YouTube 配信あり)

■会 場 二松学舎大学 九段キャンパス 1 号館

■パネル展示(林英一ゼミナール) 中洲記念講堂入口前ラウンジ

戦後 80 年 帰還者たちの記憶ミュージアム × 二松学舎大学 合同展 私たちが伝える戦争 南方へ従軍した兵士たちの記憶

■開会の辞 12:50~ 中洲記念講堂

■研究発表 13:00~

【中洲記念講堂】13:00~14:40

董の「魔法」——川端康成『乙女の港』三人エスの関係性から

曲 子為

太宰治『饗應夫人』——「饗應」に至るまで

宋 迪

宮澤賢治「雨ニモマケズ」のモチーフとしての斎藤宗次郎—歴史地理学と思想史の観点から

麻生 将

【202 教室】13:00~14:00

後漢靈帝について——謚号と評価を中心に

李屋 幸明

近代漢語「權能」の語史

中谷 仁

■講演 【中洲記念講堂】15:00~16:35

ピーター・マクミラン

日本の古典文学を次の千年へ、そして世界へ

■閉会 16:35

■懇親会 17:00~

【第1会場】

董の「魔法」
——川端康成『乙女の港』三人エスの関係性から

曲 子為

本発表は、川端康成が少女雑誌「少女の友」に発表した『乙女の港』を対象となる。大河原三千子、八木洋子、克子を中心とした「三人エス」という特異な女学生間の「友情」に焦点を当て、その行方を分析したい。少女小説における「友情」の表象とその社会的意味を探求することで、少女小説研究における新たな視点を提供し、川端の作品が持つ多層的な意義を明らかにする試みである。

まず、「少女」という概念の歴史的背景と文学的誕生について考察し、特に明治期以降の女学生文化の中で形成された「少女」の表象に焦点を当てる。明治時代における男女別学化や教育改革により、女子教育が推進される中で、女学生たちは独自の文化を形成していく。次に、「エス」と呼ばれる親密な友愛関係に注目し、作品における「友情」の象徴として描かれる花や自然の描写が、三人の関係をどのように反映しているかを分析する。また、作品における自然描写が登場人物の感情や心理を象徴的に表現する役割を果たしている点についても言及している。

最後に、作中八木洋子の卒業後の進路と大正時代の職業婦人の時代状況を考察し、女性の自立や社会的な役割を見直す契機となる可

能性について提示する。

(キヨク・シイ／本学文学研究科国文学専攻博士後期課程)

太宰治『饗應夫人』
——「饗應」に至るまで

宋 迪

『饗應夫人』は、昭和二三年一月一日に刊行された『光 CLARTE』の第四卷第一号に発表された太宰治の短編である。作品の内容は、四年前にこの家へお手伝いに来た「女中」の「ウメちゃん」が、一人称の「私」を用いて、自らの視点から「奥さま」と、その「奥さま」と一緒に生活している「私」と、そこに表われた饗應を描いたものである。

『饗應夫人』の内容について論じたものは、概ね二つの方向に分けられる。一つは、女性を神聖化したものである。「奥さま」の饗應を、太宰の作品に一貫している、女性の無償性への賞賛として評しているものである。もう一つは、「奥さま」の「饗應」を、女性あるいは人間の弱さとして評しているものである。ただ、どちらにしても、「私」が「奥さま」と同じような行動を行う理由を十分に説明していない。

本論は、「女中」である「私」を中心にはじめ、幾つかの側面から「私」の行動の原因を分析し、「私」が「奥さま」と同じような行動を行う理由を解説してみたい。

(ソウ・テキ／本学文学研究科国文学専攻博士後期課程)

宮澤賢治「雨ニモマケズ」のモチーフとしての斎藤宗次郎 ——歴史地理学と思想史の観点から

麻生将

本発表の目的は、宮澤賢治（1896～1933）の晩年の作品である「雨ニモマケズ」のモデルないしモチーフとして斎藤宗次郎が言及された点について、歴史地理学と思想史といつも一つの研究分野の観点からの実証を試みることである。

斎藤宗次郎（1877～1968）は現在の岩手県花巻市出身で、無教会主義キリスト教の信者で、内村鑑三（1861～1930）の弟子であった。斎藤は花巻川口町（現・花巻市）小学校教員を経て1926年に東京に移住するまでの間、書店と新聞取次業を営んでいた。また、斎藤は花巻川口町で宮澤賢治と交流があつたことが判明しており、その生き様から斎藤が「雨ニモマケズ」のモデルではないか、とする説が文学研究者や宗教研究者の間で唱えられてきた。しかしながら、いずれも印象論的なもので、一次史料に基づく実証ではなかった。そこで、本発表では斎藤宗次郎が遺した日記や花巻川口町時代の土地台帳、古写真などの一次史料を検証し、斎藤が「雨ニモマケズ」のモデルないしモチーフである可能性について、歴史地理学と思想史研究の知見を用いて実証する。

（アソウ・タスク／本学文学部歴史文化学科専任講師）

【第2会場】

後漢靈帝について

——謚号と評価を中心に

杣屋幸明

後漢衰退期に靈帝という皇帝が居た。その靈帝について、例えば蜀漢の諸葛亮は「出師表」に於いて、「先帝在時、每与論此事、未嘗不歎息痛恨於桓、靈也」と述べる。他の歴代の評価を見ても総じて低いように見受けられる。

その靈帝について、日中両国で近年関心が高まつてお、その政策を検討し再評価をするという動きがある。そこで私が注目したいのは、その政策、改革が曹操のそれと似ていることである。西園軍と青州兵、鴻都門学と文学振興である。この類似点から察するに、靈帝に低い評価が下される原因の1つには、同様の改革に成功した曹操との関連があるのでないだろうか。即ち靈帝は改革者としても統治者としても曹操に對せざるを得ない立ち位置に居た為に低い評価を下されたのではないだろうか。そうならば靈帝を個として見ることにより、曹操の比較対象になつてしまつたが故に生まれたバイアスを剥すことが出来るのではないだろうか。そしてそれは「再評価」という点から見ても有益なのではないだろうか。

本発表に於いては、まず先行研究を概観し、靈帝の事績や歴代の評価を改めて確認し、靈帝の評価について検討してみたい。

（モクヤ・タカアキ／本学文学研究科中国学専攻博士後期課程）

近代漢語「權能」の語史

中谷 仁

本研究では、近代漢語「權能」を対象とし、近代から現代までの用法を比較することにより、その変遷を検討する。

従来の法律用語史の研究では、「権利」の研究が活発に行われてきた一方で、類義語の「權能」はほとんど注目されてこなかった。しかし、近年ライトノベルなどにおいて「權能」が用いられた影響か、神話関係の書籍での用例が見受けられるなど、一般化の傾向にある。また、その用法も著者の解釈により差異が発生しており、現在進行形で変化している語彙のひとつであるといえる。

そこで本研究では、明治元訳聖書やライトノベルなど幅広い分野から用例を収集し、その用法と変遷について考察を行う。その結果として、以下の二つのことを報告する。一つ目は、現在用いられる権利やそのはたらきを意味する用法が、明治初期の自由民権運動をはじめとする政治活動の余波として定着したものであり、それ以前は権威のある力を意味する用法であったことを論じる。二つ目は、それまでキリスト教でのみ用いられていた「神の力」の用法において、複数の神々が登場するファンタジー小説の流行に伴う対象の拡大が発生し、用法の拡張が発生している。この二点を本研究の結論として位置付けるものである。

(ナカタニ・ヒトシ／本学文学部国文学科日本語学専攻)